鴨川上流部の中津川向山砂防えん堤に設置された構造物（京都市北区雲ケ畑）

鴨川上流の巨大柵、これ何？

実は… 豪雨時の流木止め

下流の水位上昇、橋脚破損食い止め

京都市内を流れる鴨川の上流に、棒状の構造物が横一列に並んで巨大な柵のようになった場所がある。いつ、どのような目的で設置されたのか。管理する京都府によると、豪雨時に大きな効果が期待されるという。出水期を迎える中、謎めいた設備の正体を探った。

この柵は、京都産業大総合グラウンドから約1・2キロ北の「中津川向山砂防えん堤」（北区雲ケ畑）にあり、高さ約3メートルの構造物15基が幅約30メートルにわたってずらりと並ぶ。

府河川課などによると、設置の背景には、近年頻発している豪雨の影響がある。2013年の台風18号や18年の台風21号などで、山間部では大量の倒木被害が発生。激しい雨に見舞われるたび、倒れた木々が川に落ち、三条など下流の市中心部まで大量に流れ着く事態が起きていた。

流木が橋脚などに引っ掛かると、水が流れにくくなって水位が上昇し、市街地に被害を及ぼす恐れがある。橋脚や護岸を傷つけたり復旧作業の妨げになったりするほか、木々の回収費用もかかる。こうした状況を踏まえ、20年度に約5千万円かけて砂防えん堤に整備されたのが棒状の「流木止め」だ。

設置後、さっそく効果が表れた。昨年の5月や8月の豪雨時に、上流から押し寄せた多数の流木を捕捉し、下流への流出を大幅に食い止めた。府が回収した流木の量は約170立方メートルに上った。

川の整備状況を識者らが話し合う4月の「鴨川フォローアップ委員会」でも、流木止めの効果に注目が集まった。その一方で、流木の発生元である周囲の山は手入れが行き届いていない場所が多く、府河川課などは「山の保全は重要。府や京都市の農林部局とも連携し、対応を検討していきたい」と考えを示した。

流木止めで捕らえた木々は、燃料用チップにしている。同委員会では、チップ以外の利用方法に関する質問もあり、府の担当者は「川を流れている木には石が詰まるなどし、うまく再利用するのは難しい。これからの課題だ」と応じた。府は今後、鴨川に流れ込む鞍馬川の「神山砂防えん堤」でも、同様の流木止めの整備を検討している。（坪冬樹）

2021年5月の大雨時に大量の木々を食い止めた「流木止め」